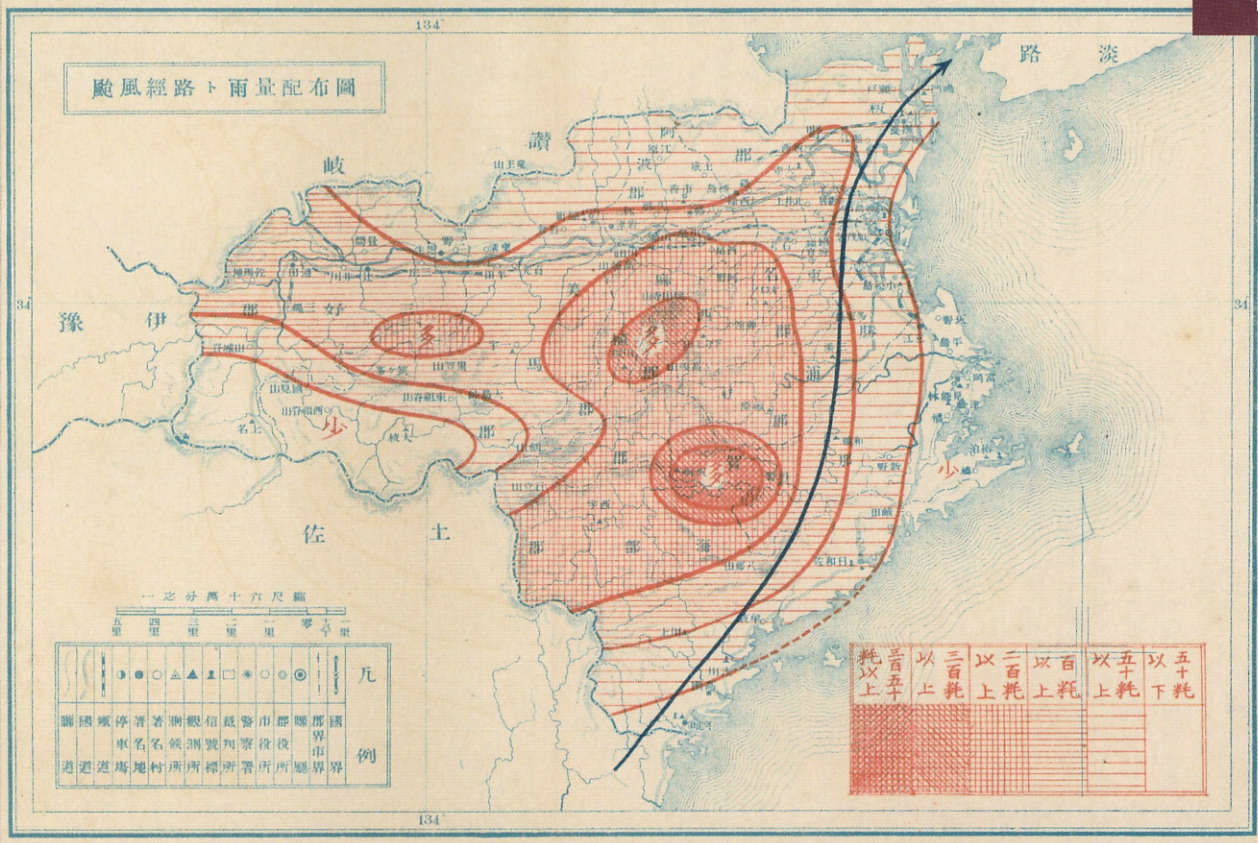


# 歴史資料に見る徳島の風水害



入場無料

【会期】平成29年10月31日(火)～平成30年1月28日(日)

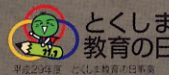
【会場】徳島県立文書館 2階展示室

【休館日】月曜日、第3木曜日(祝日と重なる場合はその翌日)  
年末年始(平成29年12月29日～平成30年1月4日)

展示解説 平成29年11月26日(日) 平成30年1月7日(日)

文化の森総合公園 徳島県立文書館  
Tokushima Prefectural Archives

〒770-8070 徳島県徳島市八万町向寺山  
TEL:088-668-3700 FAX:088-668-7199  
<http://www.archiv.tokushima-ec.ed.jp/>



## いあいさつ

急峻な四国山地をかかえる徳島県は、梅雨の長雨や台風などにより度々洪水や土砂崩れなどの被害を蒙って参りました。七夕水・阿房水・八朔水・寅の大水・高磯山崩壊……。人々の記憶の中に留まり、歴史資料にその名を残した大災害は枚挙にいとまがありません。これらの大規模自然災害は住民の生命や財産を奪い、生活の基盤そのものを破壊するなど、その地域に甚大な被害をもたらしてきました。しかし、人々はこれらの災害に立ち向かい、復興に取り組んできたことも歴史資料は物語っています。今でも大河川の流域に見受けられる高い石垣を組んだ屋敷や川沿いの竹林などは、水害から身を守り、ある意味それと共存せざるを得なかった人々の叡智のあらわれと捉えることが出来ます。

今回の特別企画展「歴史資料に見る徳島の風水害」では、古文書・歴史公文書・写真などの歴史資料をとおして、江戸時代以降に徳島県を襲った水害・土砂崩れ・高潮などの大規模災害の実態と、それに立ち向かっていった人々の営みをご

紹介いたします。この展示をとおして皆様が徳島における風水害の歴史に関心を持たれ、それが地域の防災・減災に少しでも役立てていただければ幸いです。

最後になりましたが、今回の特別企画展の開催に際しまして貴重な歴史公文書をお貸しいただいた阿南市桑野公民館・神山町教育委員会をはじめ、資料所蔵者の皆様、関係者の皆様に心からお礼を申し述べさせていただきます。

平成二十九年十月三十一日

徳島県立文書館長 徳野 隆

# 徳島の風水害

四国山地は険しく、吉野川・那賀川など県内の大きな川は流れが急である。そのため、徳島の地は、風水害による氾濫・洪水を古くから繰り返しながら成立してきた。梅雨時期の長雨や台風は、人々を苦しめる一方、作物を育てるためには無くしてはならないものでもあった。こうして自然と折り合いをつけながら、ある場所では克服し、一方では大きく痛めつけられながら生活を続けてきた。

梅雨の長雨や台風は、毎年のように徳島の地を襲ってきた。しかし、その強さや、作物の生育時期との関係によって、大きな被害につながったり、結果的に豊作になったりもする。逆に雨が降らなければ干魃となる。

そのため、蜂須賀家が作らせた徳島藩の正史とされる『阿淡年表秘録』を見ると、江戸初期にはほとんど記述が見られないが、戦時状態が落ち着いた万治・寛文(一六五八から一六七二)頃から風雨洪水の記録が見え始め、享保七年(一七三二)の大洪水以降は、阿波国内の被害状況(石高損毛)を含め数年に一度、時には毎年のように記録されている。

それでは江戸時代の庶民はこうした頻発する風水害に対してどのように対処していたのだろうか。『阿淡孝子伝』にある西麻植村(吉野川市鴨島町西麻植)与兵衛・与右衛門親子の記述から見よう。



「阿淡孝子伝 後編巻之七」西麻植村与兵衛・与右衛門 より

表1 記録に残る県内に大きな被害を与えた風水害

万治元年(1658)	8月大風雨洪水潮入
寛文2年(1662)	6月大風雨
享保7年(1722)	6～8月風雨洪水 計174,552石損毛 潰家444戸
享保14年(1729)	8月大風雨 174,370石損毛 (15.16年も大風雨)
明和2年(1765)	6～8月風雨洪水高潮 計179,279石損毛 酉年大水
安永元年(1772)	8月風雨洪水 計117,981石損毛 流家70 流死86
文化元年(1804)	7～8月出水 計145,082石損毛 流死28 潰家等1,586軒
文化13年(1816)	秋度々風雨出水 計163,212石損毛 流死9
天保6年(1835)	5～閏7月風雨水害 計170,098石損毛 死亡3
天保14年(1843)	7.6 七夕水
嘉永2年(1849)	7月 阿房水・酉の水
安政4年(1857)	7～8月 大風雨・八朔水
万延元年(1860)	5月長雨洪水 7月大風雨高潮
慶応2年(1866)	8月寅の大水
明治21年(1888)	7月洪水 8月30日台風 死者51 全壊2868 (以下新暦)
明治25年(1892)	7月23～25日台風洪水高潮高磯山崩壊 死者329 全壊3349
大正元年(1912)	9月22～23日台風洪水高潮 死者81 全壊426
昭和9年(1934)	9月21日 室戸台風洪水高潮 死者37 全壊14595
昭和20年(1945)	9月16～17日 枕崎台風洪水 死者44 全壊1166
昭和29年(1954)	9月12～13日 ジェーン台風 死者9 全壊131
昭和36年(1961)	9月14～16日 18号台風 第2室戸台風 死者11 全壊569
昭和50年(1975)	8月22～23日 台風6号 死者15 全壊72
昭和51年(1976)	9月8～13日 台風17号 死者10 全壊流失187
平成16年(2004)	8月30～31日 台風16号 全壊2 木沢村で山腹崩壊
平成16年(2004)	10月20～21日 台風23号 戦後最大の洪水となる。

この挿絵に描かれているのは、享和元年(一八〇一)の洪水の際、与兵衛が川の様になった村内へ船で乗り出し、民家の多くが流出する中、戸板に掴まって難を逃れようとした人々を救っているところである。このとき風や水勢が強かったにもかかわらず、辛うじて全てを救ったという。その後流れてきた牛馬を助け、農具を拾い上げて持ち主に戻したり、飢えた人々には穀物などを分け与えたと書かれている。こうした奇特なる人が現れ、洪水の際に人々がどのように振る舞うことが良いのかというひとつの手本となった。

与兵衛・与右衛門の項には、これ以前の風水害の時も、洪水後に蔵を開けて施しをしたり、流された農具や種を与えたことが書かれており、吉野川流域に住む人々にとってこうした水害が近くにあり、助け合いながら乗り越えてきた様子を知ることができる。

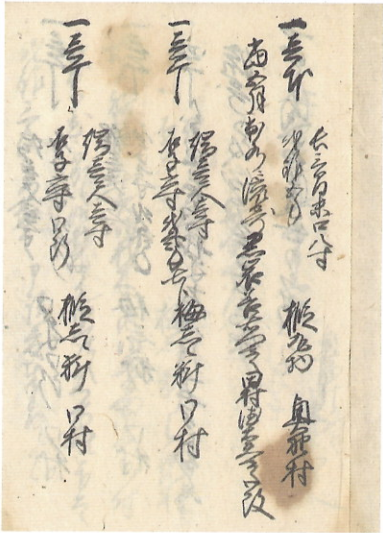
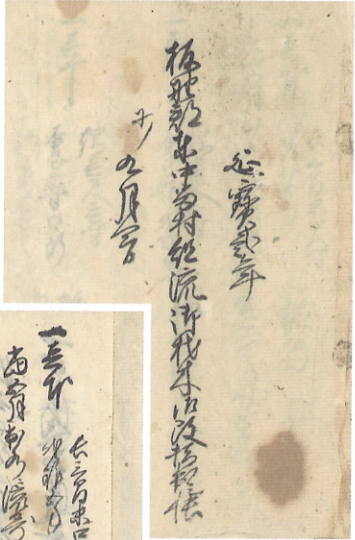
# 吉野川流木の管理

吉野川の出水時の問題の一つとして、上流で伐採された材木が流れ出し、下流域で堤防を破るなどの被害を与えることがあった。その流れ出てきた材木は、下流の村々で拾われ管理され、一本宛帳簿に付け上げられ、役所に届けられた。

延宝二年(一六七四)九月に作成された「板野郡東中富村組流御材木御改指出帳」は、この年の五月と八月十七日に起きた出水により、祖谷山の年貢となる材木が下流の東中富村(現藍住町)に流れ着き、各村で預かっていた材木を調査して一冊にまとめた帳簿である。奥野村(現藍住町)では五月に縦一本と八月十七日に縦二丁と梅二丁、乙瀬村(現藍住町)では梅一丁、西貞方村(現徳島市応神町)で梅一丁、東中富村では梅二十三丁、坪木十一本の四村分が取りまとめられて報告されている。材木には一本ごとに渡辺九万右衛門らの改印が押されており、祖谷山からの宍料年貢(材木や板材を納入する年貢)であることがはっきりする。

またこの帳簿には、祖谷山の材木を商人達が切り出した分について尋ねる記載があるが、商人が切り出した材木は含まれていない旨を報告している。この頃祖谷山から多くの材木が切り出されていた様子が分かる。

このように吉野川の出水により流木になることを前提にして、整然と吉野川を流す材木の管理が行われていたのである。



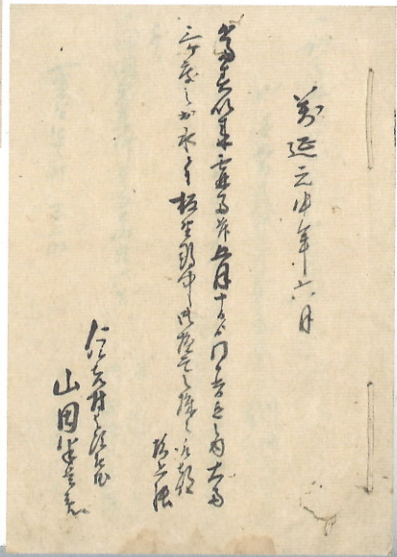
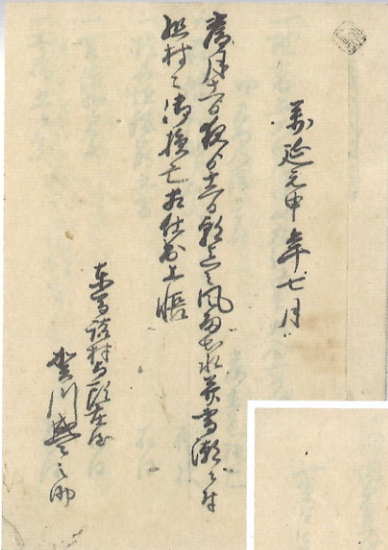
板野郡東中富村組流御材木御改指出シ帳 (延宝2年) 1674

# 万延元年の洪水・海嘯

住吉村組頭庄屋山田家には、組頭庄屋の用務として、郡内の様々な情報が集められることがあった。特に万延元年(一八六〇)の風水害について、板野郡内における被害を書き上げた帳簿が七冊残されており、板野郡の様子を細かく知ることができる。

この年は春から霖雨(長雨)が続いたようで、そのうち梅雨時期の五月十日から十六日にかけては特に大雨が三度降り、大きな被害が出ている。板野郡中ではこの時約五万四千五百石中、一万九千七百石(約三十六%)が損毛となり、このうち約一千五百石は川成(田島が川となってしまうこと)、山崩れ三十七ヶ所、流死人一人、堤切五千二百二十八間(約九千二百三十メートル)に及んでいる。

さらに夏七月十一日夜から十二日にかけてこの地域を暴風雨が襲っている。この時は河川の堤が切れ、かなりの洪水被害が出たのみならず、高潮が海岸を襲ったようであり、その被害は海岸部を中心に広がっている。小松・富吉・松岡・金岡・富久(現徳島市川内町)・豊久・満穂(現松茂町)の各新田には皆無とあり、壊滅的な被害を受けている。このほか、吉野川河口の宮島浦・別宮浦(現徳島市川内町)でも皆無、徳長村(現鳴門市)では大手堤が切れて皆無となったり、吉永村(現鳴門市)では高潮が大手堤を乗り越え、数日間村中が潮に漬かったことも書かれている。さらに、漁網や船九艘の流出、溺死一人などの被害も見える。

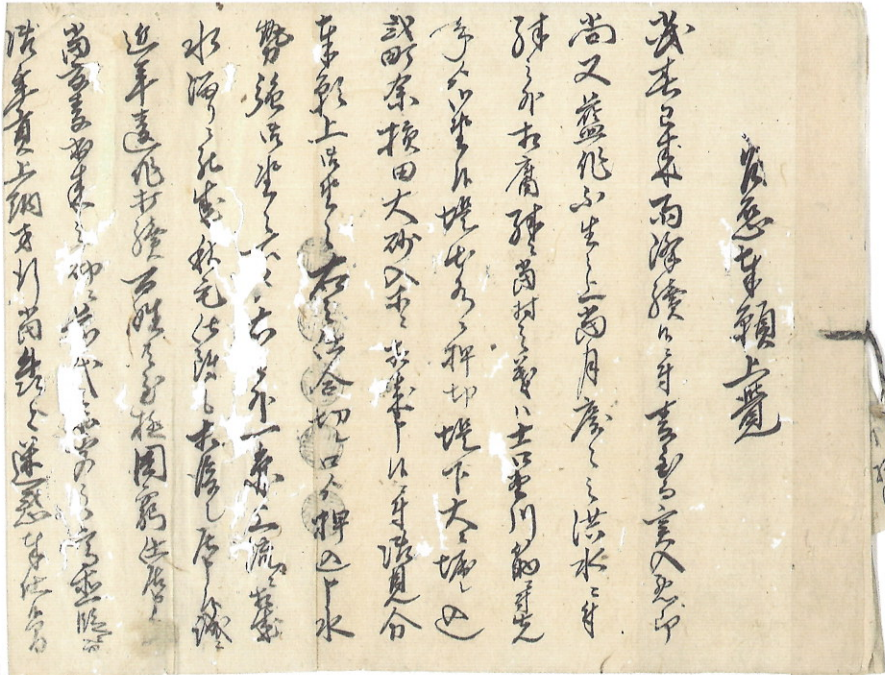


万延元年の板野郡内の水害被害に関する帳簿

# 吉野川筋の洪水

竹瀬村(現藍住町)庄屋木内家に残る古文書には、万延元年(一八六〇)の五月に起きた大出水への対処として、藩や給人へ出された願書が残されている。この水害は、春からの長雨に加え五月に入ってから三度も起きた集中豪雨に関する被害の一部である。竹瀬村では、万延元年は春以来雨が降り続き、まずは春麦の実入りが悪く、さらに藍作の苗の生育が悪い上に、五月に入って度重なる洪水があり、藍は根腐れを起こしている。さらに吉野川(現在の旧吉野川)の堤防は先年の出水(洪水)で押し切れ、特に堤の下が大きく掘り込まれ、その砂が2町余の田畠に流れ込み、その付近はすべて池(水たまり)のようになり、田植えも出来ない状況が続いている。この先年の洪水は八朔水と言われた安政四年(一八五七)の洪水を指しているのではないかと思われるが、復旧が行われる前に、大きな洪水が重ねて起きていることになる。

吉野川流域の村々の人々にとって、水害はかなり身近な存在であった。特に幕末のこの時期は、急速に物価の上昇が進んでいることもあり、頻発する災害が追い打ちをかけるように社会の矛盾を深めていたのである。



万延元年上覚 (万延元年)

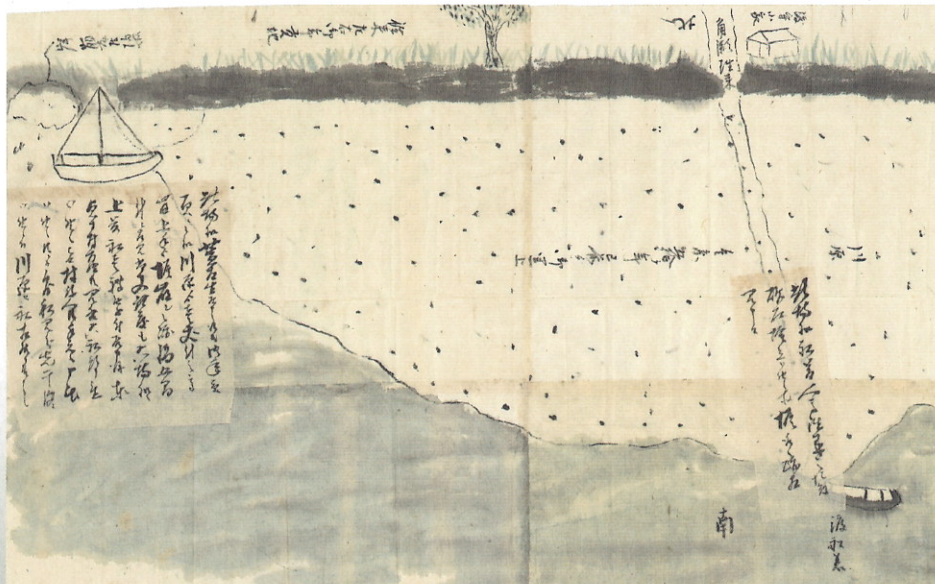
# 高崎村角瀬川の出水

高崎村角瀬(現徳島市国府町東黒田角ノ瀬)は吉野川の南岸、支流の飯尾川に挟まれた地域である。飯尾川は角ノ瀬付近で分流し一方はそのまま北に流れ吉野川と合流、もう一方は飯尾川の本流として東へ流れ、現在の春日町で鮎喰川および吉野川と合流している。

山田家文書には慶応四年の出水に関係する文書二通と絵図が残されている。高崎村の百姓達は、慶応三年(一八六七)春に勧農普請を命ぜられた吉野川の堤防等の改修を終え、最後に飯尾川角瀬渡し付近で崩れた堤防の工事を行おうとしていた。そのため吉野川北岸の東貞方村(現徳島市心神町)から材料である土砂を取り運ぼうとしたところ争論となった。

この争論のため工事は遅れ、六月となり台風シーズンが近づいてきた。このままでは、堤防が崩れたところから再び水が人家や田畑に直接被害を与える恐れが出てきたため、高崎村の東を流れる鮎喰川の河原などから土を取ることを願っていたのである。

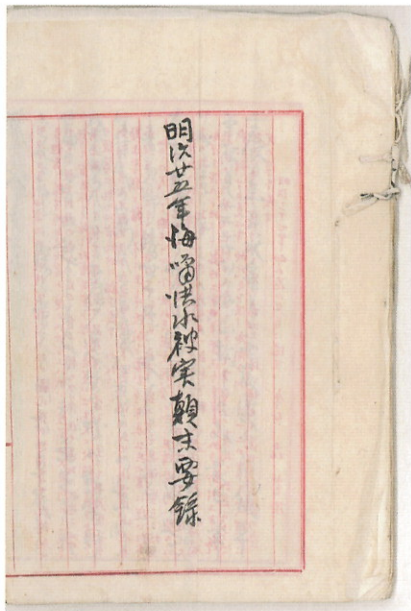
しかし、時すでに遅く、工事が完成する前に出水がこの地域を襲った。堤防が切れ、そこが水道となって人家や田畠に被害を与えた。こうした状況を知ってもらうため勧農郡代手代に見分を願っている。高崎村の人々の懸念は当たってしまったのである。



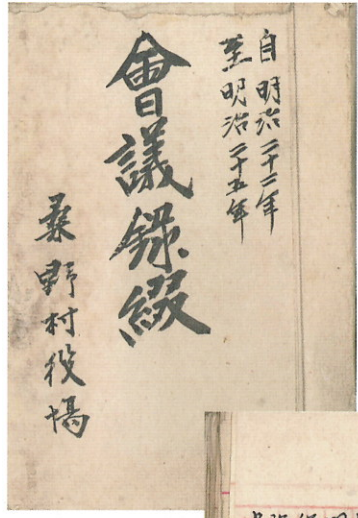
(角瀬渡し場付近堤防普請場所絵図) 一部

# 明治二十五年の水害

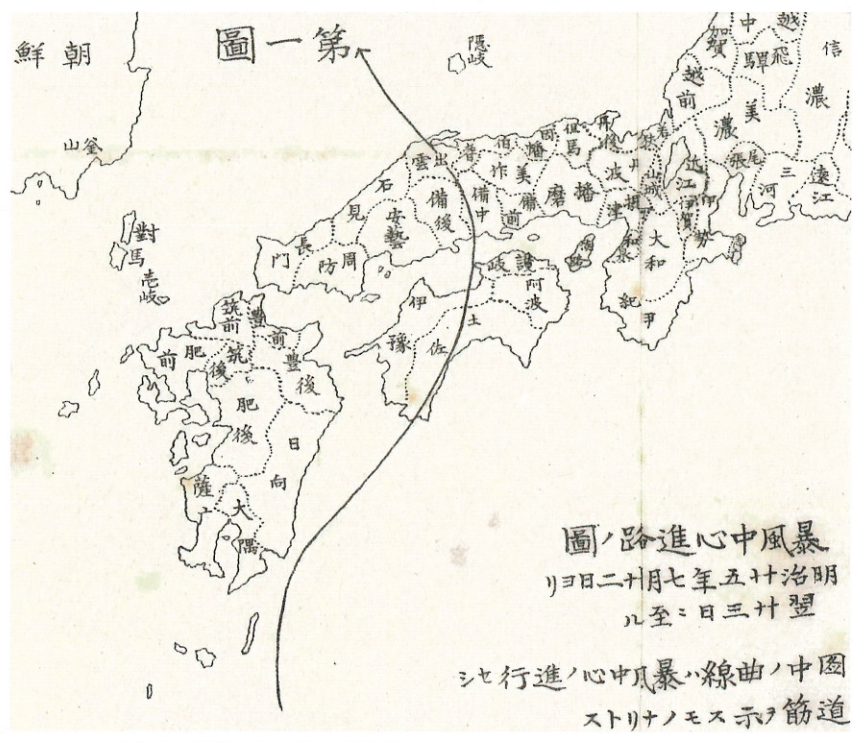
「高磯山（現那賀町）山腹崩壊」が有名な明治二十五年（一八九二）の七月二十二、二十三日に発生した風水害がある。徳島県は明治二十五年七月三十一日付けで「明治二十五年七月徳島県下非常海嘯及山崩被害一覽表」を刊行している。これによれば、この風水害・高潮及び土砂災害により、県下で死者三二九人、家屋の全壊流出三、三四九戸、堤防の破損五、三八二ヶ所、道路損壊一、四五八ヶ所におよぶ甚大な被害を及ぼしたとされている。その影響は徳島全県下に及んでおり、徳島における近代最大の天災と言つてよいだろう。



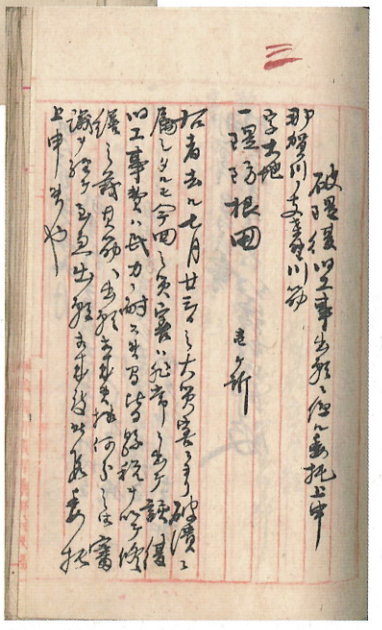
①明治25年海嘯洪水被害顛末要録（原稿） 中瀬儀兵衛  
後に川内村（現徳島市川内町）村長となる中瀬儀兵衛が記した明治25年風水害の記録原稿。板野郡内を中心に記され、後に刊行されている。



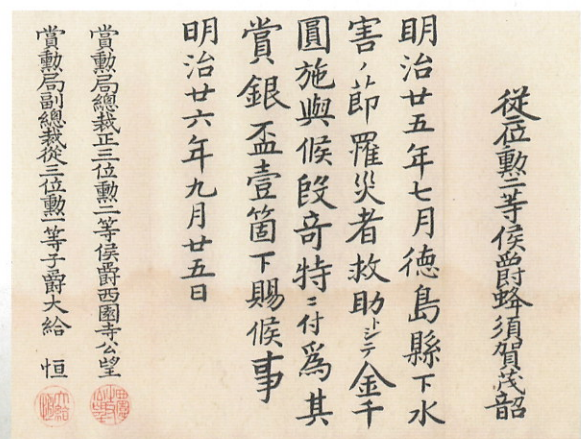
③桑野町（現阿南市）公文書 桑野村議会議事録  
桑野村議会の議会議事録には、明治25年7月の風水害により、桑野川が決壊し、破堤をはじめ甚大な被害を受けていることが分かる記述が掲載されている。



②徳島県測候所気象調査報告第8号  
徳島測候所が明治25年9月19日付で刊行した「気象調査報告書第8号」。この報告書に掲載された暴風中心進路の図を見ると、7月22日～23日に徳島の西側四国を縦断した台風であったことが分かる。



⑤木杯（暴風洪水罹災民救助）  
名西郡高川原村長が明治25年の水害に救助金を出したことに對する徳島県知事から与えられた木杯。



④蜂須賀茂詔（褒賞状）  
元徳島藩主蜂須賀茂詔が明治25年の水害被害者救助に金1000円を出したことに對する褒賞状。



1934 (昭和9)年 室戸台風  
町を襲った高潮の甚大な被害(由岐町)



1934 (昭和9)年 室戸台風  
被害地区の復旧に当たる婦人会(池田町)



1955 (昭和30)年 台風22号  
徳島市議会場に避難した住民(徳島市)



1950 (昭和25)年 ジェーン台風  
床上高く浸水した街並み(驚敷町)

▼ 2004 (平成16)年 台風10号  
日本の日降水量を更新し山腹崩壊が続出(那賀町)



1961 (昭和36)年 第2室戸台風  
河川の氾濫被害と救助船(山川町)



1983 (昭和58)年 台風10号  
河川の氾濫で倒壊した民家(山城町)

# 展 示 資 料 一 覧

No	表 題	年 代	資料番号
<b>文書と絵で見る江戸時代の風水害</b>			
1	板野郡之内東中富村川成改帳	寛文 6 年(1666)	イヌフ00070
2	板野郡東中富村組流御材木御改指出シ帳	延宝 2 年(1674)	イヌフ00936
3	(竹瀬村絵図)	(享保期以前)	キノウ01525
4	乍恐奉申上覚(出水損田に付)	万延元年(1860)	キノウ01431
5	(東西中富村河川絵図)	(近世中期)	イヌフ00935
6	板野郡/東中富村砂入指出帳	寛延元年(1748)	イヌフ00939
7	乍恐奉願上覚(普請場所洪水痛に付手当願)	享和元年(1801)	イヌフ00945
8	東中富北吉野川崩口之絵図	(近世中期)	ヤマ204496
9	阿淡孝子伝統編七巻	文久 2 年(1862)	イワム00508
<b>続く風水害</b>			
10	美馬郡東端山風雨洪水記録	天明 2 年(1782) ~	タケタ00369
11	板野郡住吉組村々当八月二十日風雨洪水損亡指出帳	寛政 3 年(1791)	ヤマ204542
12	板野郡住吉組村々当七月二十六日風雨洪水損亡指出帳	寛政 4 年(1792)	ヤマ204543
13	板野郡住吉組当七月二十四日五日大雨出水損亡指出帳	寛政 5 年(1793)	ヤマ204545
14	板野郡住吉組当七月二十一日二日風雨洪水損亡指出帳	寛政 6 年(1794)	ヤマ204546
15	板野郡住吉組当八月二十八日九日風雨洪水損亡指出帳	寛政 7 年(1795)	ヤマ204547
<b>万延元年の板野郡水害</b>			
16	当春以来霖雨并五月十日より同十六日迄之内大雨三度出水に付板野郡中御損亡之株々取都指上帳	万延元年(1860)	ヤマ204602
17	当月十一日夜より十二日朝迄之風雨出水并高潮に付組村々御損亡相仕書上帳	万延元年(1860)	ヤマ204601
18	平石組高付新田処去ル十一日之夜風雨高潮に付御損亡取調帳	万延元年(1860)	ヤマ204598
19	板野郡北灘組当月十一日夜大風雨高潮にて御損亡相成候株々相都差上帳	万延元年(1860)	ヤマ204596
<b>慶応4年の高崎村出水</b>			
20	(角瀬渡し場付近絵図)	(慶応4年)(1868)	ヤマ202333
21	乍恐奉願上覚(角瀬川縁普請砂取場の件行着願)	慶応 4 年(1868)	ヤマ202335
22	乍恐奉願上覚(角瀬川縁古堤繕普請願)	慶応 4 年(1868)	ヤマ202336
<b>明治25年の徳島大水害</b>			
23	阿波国全図 洪水浸水地色分図	明治26年(1893)	イワム01532
24	明治二十五年七月徳島県下非常洪水海嘯及山崩被害一覧表	明治25年(1892)	ナカセ00702
25	徳島測候所気象調査報告第八号	明治25年(1892)	イワム01239
26	明治二十五年海嘯洪水被害顛末要録	明治37年(1904)	ナカセ00701
27	蜂須賀茂韶(賞状徳島県水害罹災者救助寄附)	明治26年(1893)	ハチス00267
28	木杯(暴風洪水罹災民救助金寄附)	明治26年(1893)	ハン500001
<b>公文書等に見る昭和・平成の水害</b>			
29	昭和9年9月21日払暁徳島県を通過した台風概況	昭和 9 年(1934)	イワム04978
30	台風13号による郷土の水害と今後の対策	昭和28年(1953)	イワム03793
31	風水害関係編冊(下分上山村)	昭和 9 年(1934)	神山町郷土史料館
32	ジェーン台風被害綴	昭和25年(1950)	阿南市桑野公民館

※資料保存のため展示品の一部を替えることがあります。

☆担当職員による展示解説 (文書館2階講座室・展示室)  
日時：11月26日(日)・1月7日(日) 午後1時半から

## 特別企画展「歴史資料に見る徳島の風水害」

平成29年10月31日発行

編集・発行 徳島県立文書館

印刷 グランド印刷(株)